

展開し、明治十二年（一八七九）県会が設けられると、県議・初代議長に当選し、防長協同会社の社長も兼ねた。以来二〇年余にわたって県政の大御所として実権を握る。明治十五年には「鴻城立憲政党」を結成し、同十七年には「防長新聞社」を設立して社長になり、同二十一年山口県赤十字社の副支部長に就任するなど地方行政や公共事業に尽くした（その間、矢原村議員・議長・村長を兼任している）。その後、明治二十三年（一八九〇）衆議院議員に当選したが、「山口県のことには吉富にまかせておけばよい」という元老の信頼に依り、生涯地方政治家として活躍し、山口育児院の設立にも尽力するなど福祉事業にも多くの事跡を残している。

大正三年一月十八日没、享年七七歳。墓は船田墓地にある。



朝田古墳群
(朝田トンネルの上部)

名所旧跡

○大曲り(周布町)

昔の石州街道は、讃井の袖解橋を南下して湯田境の下市橋を渡ると、今井の宛ノ木から上矢原の高関まで西寄りに大きく曲がっていた。土地の人はこれを「大曲り」と呼んでいる。これは、榎野川がかつては富田原の北側を流れ、今井町から朝倉市に大きく蛇行していたため、その川に沿って街道がつけられた名残と推察されている。明治二十九年(一八九六)ごろ、現在のように県道(今は市道)が真直ぐに改修されて裏道となった。



大 曲 り

○周布公園(周布町)

幕末の動乱期に、長州藩の改革派の重臣として藩政を指導した周布政之助は、元治元年(一八六四)反対派の台頭するなかで近くの吉富邸において自刃し、舟田の墓地に「麻田公輔」の変名で葬むられた(人物編参照)。昭和六年十一月、彼の功績をたたえ墓のある場所を永久に伝えようと、有志によって「嗚呼長藩柱石周布政之助君碑」と題する顕彰碑が建立され、公園として整備されている。

(グラビア写真参照)

○矢原の一等水準点(矢原町)

矢原町(上矢原)藤井和夫氏宅の屋敷の隅に、国土地理院の一等水準点がある。この水準点は、明治のはじめ東京都千代田区永田町の陸地測量部(尾崎記念公園)を水準原点とし(標高二四・四一四メートル)、全国の主要な国道に沿って二キロ毎に設置された。矢原の水準点は、明治二十二年二月に設置されており、平成元年の計測では、(標高一五・五五八三メートル)だった。この辺では三和町の円龍寺、下は岩富の平川英夫邸横にあるが、埋設した当時の花崗岩の標石が残っているのは、ここだけだという。

○阿弥陀堂跡(矢原町)

矢原町に、阿弥陀堂という地名が残っており、ここはもと万福寺という大寺の跡といわれている。『地下上申』によると、「往古は万福寺という大寺であったが、焼失して大破し、本尊ばかり残ったので地下の者が三間に四間半のお堂を建立した。本尊の阿弥陀坐像は、五尺の大仏で、弘法大師の作と伝えられている。浄土宗、山口長寿寺抱え」と記されている。現在は、地名のみで阿弥陀堂もなく、当時境内にあったと思われる、地藏尊一基が残っているのみである。



矢原の一等水準点

○しらべの森（中矢原）

石州街道、中矢原の吉永酒場の少し下のあたりを「しらべの森」跡という。『風土注進案』（一八四一年頃作成）によると「永禄十二年（一五六九）大内輝弘が豊後の国から押し寄せて、秋穂白松に着岸し、山口に乱入のよし高嶺城へ注進：防御の軍兵此地にて老弱多少をしらべしより、いつしか地の名とはなりぬ」とある。大内輝弘は、豊後の大友氏に保護されていた人物である。当時大内氏はすでに亡び、毛利元就は九州攻略のため長府に本陣を置いて、筑前の立花城を攻撃中であった。豊後の大友宗麟は、毛利方の後方かく乱をねらい、周防灘から山口への侵攻計画をたてた。永禄十二年（一五六九）十月に、輝弘に大軍を授けて海路秋穂に上陸させ、山口に攻め入らせた。その時、留守をあずかっていた毛利の武将が、ここに関所を設けて通行人を調べたことによるという。

○一里塚（中矢原）

昔矢原に一里塚があった。街道の里程を知らせるもので、小郡町津市から一里二八町、石見境の野坂峠から一一里の地点である。その位置は『地下上申絵図』では教正寺（現養元寺）上側の里道のそば、『風土注進案』には湯田村の上湯田と下湯田の境に記されている。当時は石積み中央に標木を立てた程度のものだったといわれているが、今はその跡も明らかでない。明治になって道路改修のとき、曲がっていた街道（県道）を真っ直ぐに拡張した際、取り払われたのであろう。

○矢原の河川公園（矢原町）

この河川公園は、昭和四十七年に石津河原の河川敷を利用して造られた。当時「河川法」による河川敷の利用は、一切の樹木を切り払わなければならなかったが、美しい自然の景観を残したいという地域の人々の強い運動が実を結び、現在のような三十種におよぶ樹木の茂る自然公園が完成した。ここではスポーツ、レクリエーションなど多目的に活用され、また野鳥の宝庫として、バードウォッチングなど愛好者によってにぎわっている。

（グラビア写真参照）

○朝田墳墓群公園（勝井）

国道九号線（元山口バイパス）の眼鏡トンネル上にある古墳公園。国道の建設にともない昭和五十年からの発掘調査によって発見された朝田墳墓群第一地区は、弥生時代後期から古墳時代にかけての埋蔵遺跡で、古墳のデパートといわれる貴重なものであるところから、下をトンネルにして残された。国の史跡指定をうけ、復元工事を行い、平成四年三月に山口市で初めての史跡公園として開放されている。

（グラビア写真参照）

○山伏さま（和田）

和田公会堂のところから旧街道を少し下ったところに、「山伏」という地名があり、その道端に「山伏さま」と、地元の人から親しまれている小さな祠がある。昔、ある大名の家老と家臣（若夫婦）

○潮境（朝田）
朝田川（関屋川）が榎野川本流に合流したあたりを土地の人は潮境と呼んでいる。榎野川の河口に淋光井手が作られて淡水化されるまでは、この辺りまで潮がさしていたといわれている。



王子の森

○関屋（朝田）
阿仙原から流れ出る朝田川（関屋川）が榎野川に合流するあたりに関屋という地名（小字名）がある。大内時代に山口を防備する目的で、石州街道の通行人を取り調べる関所が置かれたところから名付けられたであろう。大内中期には関銭も徴収したという。その当時、宮野村、小鯖村、吉敷村にもそれぞれ関所があり、朝田の関所を加えて四境の関と言ひ伝えられている。

塔頭（末寺）である巨福庵のあったところで、同庵中興の光澤即明和尚が大乗妙経を一石に一字ずつ書写して埋納するため、宝暦七年（一七五七）に村人の寄進によって建立した石造宝塔である。

（グラビア参照）

○大乗妙典宝塔（和田）

「子育観音」「子安観音」といって崇敬され、毎年お祭りが行われている。この地は小鯖禅昌寺の先端を「王子の森」という。享保十三年（一七二八）の『地下上申絵図』（地下図）にもすでに王子ノ森と記されているが、当地に伝わる大内氏の始祖淋聖太子の王子伝説によるものであるのか。現在はJR山口線と国道九号線によって背後を分断され、独立の丘陵をなし、茶臼山とも呼ばれている。ここは弥生時代中・後期の墳墓とみられる王子の森墳墓群と、古墳時代の石室墳である門前遺跡が発掘されている。

（写真参照）

○王子の森（朝田）

和田、朝田両地区の境にあり、陵ヶ峠（城ヶ峠）の丘陵部の先端を「王子の森」という。享保十三年（一七二八）の『地下上申絵図』（地下図）にもすでに王子ノ森と記されているが、当地に伝わる大内氏の始祖淋聖太子の王子伝説によるものであるのか。現在はJR山口線と国道九号線によって背後を分断され、独立の丘陵をなし、茶臼山とも呼ばれている。ここは弥生時代中・後期の墳墓とみられる王子の森墳墓群と、古墳時代の石室墳である門前遺跡が発掘されている。



山伏さま

○高場山（朝田）

小郡町との境界近くの国道から眺めると、朝田ヒルズの後方に円錐形の美しい山が見える。これが高場山（一四二メートル）で、信仰の山といわれている。この山はかなりの急峻で、修験者の修業地であつたらしく、山腹には何体かの石仏像があり、行者が住んでいたという住居跡や手洗石が残っている。頂上には天明三年（一七八三）と刻まれた役行者像が石祠に安置されている。この役行者像はいつのころか集落にお迎えして行者講を持ち回りで開いてお祭りを続けていたが、戦時中に中止し、山頂に移したという。

○朝田川のホタル（朝田）

山口ホテルは五〇〇年前の大内時代から有名だった。大歳の榎野川筋はゲンジボタルの発生地で、幹支流の天神河原、出合河原、秋穂渡瀬、吉敷川などが名所として知られていたが、戦後は全く見られなくなった。かわって、最近朝田川の郷多良橋からクレソンの自生する清流を上り、河内橋を経て河内川、馬庭一帯で、すばらしいホテルの乱舞を見ることが出来る。最盛期は五月下旬から六月上旬で、知る人ぞ知るホテルの名所として脚光をあびている。大内時代から「ホテル合戦」は旧暦四月二十日とされてきたが、そのころが見ごろなのであろう。



馬庭の大岩

○馬庭の大岩（馬庭）

馬庭に大岩口という地名がある。朝田川をさかのぼって、ちょうど馬庭部落の入り口にあたる山あいの川の中に、四メートル四方余の大岩が鎮座しているところから、そう呼ばれたのであろう。この大岩は昔は二個あつて馬庭への出入りの邪魔をしていた。昭和八年、道路改修で現在の道路に付け替えたとき、一個は取り除かれた。古老の話によると、「昔々、山奥に住む山姥が、大きな荷物を両手に提げて馬庭まで下りてきて、ひと休みした。そのとき、忘れ物を思ひだしてあわてて引き返し、荷物はそのまま忘れてしまった。それが二つの大岩になった」という。

○阿仙原の石鍋（阿仙原）

「地図から消えた阿仙原」といわれるように、阿仙原は朝田の国道から三キロも北に入った山奥で、電灯もつかないまま昭和三十九年の転出を最後に住む人もいなくなった仙境である。田圃は全部植林されて昼なお暗く生い茂った部落中央から、支流の石鍋川に沿って約三〇〇メートル登ると、榎木山（四一五メートル）から流れる清流が小さな滝となり、そこに一枚岩の滝壺がある。



阿仙原の石鍋

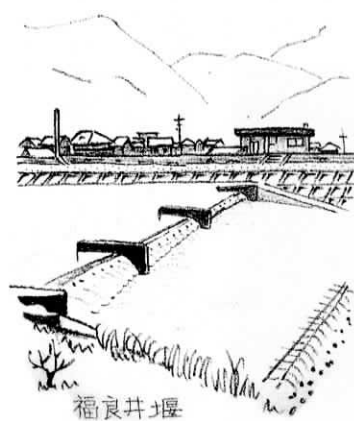
年 表

時代	西 暦	事 項
旧石器	約BC一万年以上前	- 山口盆地に人間が住み始める。 - 平川の堂道遺跡から後期の石器が見つかる。
縄 文	約BC一万年前～ 二三〇〇年前	- 榎野川・吉敷川流域の台地から土器が見つかる。 - 朝田墳墓群第Ⅰ地区で縄文式土器が見つかる。
弥 生	約二三〇〇年～ 一七〇〇年前	- 朝田墳墓群第Ⅱ地区で中期の竪穴住居跡が見つかる。 - 食糧貯蔵穴から、ドングリ・マメ・米とともに、生きた種子一個が見つかる。 - 朝田墳墓群第Ⅰ・Ⅱ地区、王子の森墳墓群などで、中・後期の墓が見つかる。
古 墳	約一七〇〇年～ 一四〇〇年前	- 朝田墳墓群第Ⅱ地区から前方後円墳が見つかる。 - 朝田墳墓群全体から横穴式古墳群・群集墳や、土器・鉄剣・鏡などの副葬品が見つかる。
大 和	六四六年（大化二）	「大化の改新」始まる。国・郡・里（郷）の行政区画。条里制による地割りが行なわれる。

直径約三メートル深さ一・九メートルのくぼみに水をたたえた大岩で、この滝壺が「石鍋」である。まさに石の大鍋で、この愛称は享保十三年（一七二八）の『地下上申絵図』にも地名として記録されており、現在も小字名として残され、また最後に転出した野村家の門名でもあった。気の遠くなるような長年月の侵食作用によるものであるが、それにしても自然の力の偉大さに驚かされる。

○夜泣き岩（河内）

朝田川に架かる郷多良橋を渡って旧道を馬庭に向けて上り、朝田神社（五ノ宮）跡を少し過ぎると、左手の山すそに大きな岩がある。これが「夜泣き岩」である。その由緒などはよくわからないが、古老の話によると、夜泣きする子連れをお参りするとご利益があったという。



福良井堰